

## 長崎大浦クリーニング屋物語

木原 妙子

私の曾祖父山口善吉が、今の福岡県うきは市吉井町より長崎に来たのは、慶応元年2月9日と書いてあった。善吉は山口團蔵の次男で弘化元年(1844)11月20日生、20歳の時長崎に来て、クリーニング業を始めようです。

明治元年1月15日南高来郡山田村、久米茂三郎二女で嘉永2年(1849)12月10日生まれのハルと結婚。ときに善吉24才、ハル19才であった。

最初に大浦でクリーニング業を始めた人は、角谷弥平氏と父から聞いたことがある。後に大浦洗濯営業組合が出来、営業者人名の初めに名前が書いてあったのは角谷弥平氏だった。

大浦東町に今でも当時の井戸が残っている。法務局で調べたら、大浦東町2番地5坪、明治26年8月1日分割と書いてあったが、法務局が出来た時期がその頃でその前の記録はありませんと言われた。



大浦商店街(山口善太郎撮影)

井戸は、大浦447番戸 角谷弥平、大浦950番戸 山口善吉、大浦945番戸 松尾扇三と3人の所有だった。

大浦洗濯業組合20名の組合員の名前が残っている。善吉は大正2年10月に亡くなっている。

善吉の長男重吉は明治元年11月4日の生まれで、明治3年養子に迎えたと記してある。ところが明治5年実子吉松が生まれたが、長男が既にいた為、吉松は次男として登記してある。

明治43年11月に善吉は、重吉を離別したと記してある。しかしその後、大正2年善吉没後1ヵ月再び善吉家内ハルは重吉を山口家に復籍させている。そして大浦諏訪神社の再建記念碑の20名の組合員の名前の中に重吉の名前もあった。

その後、長男重吉は、西小島1番地で「ばってん」という料理屋を開いている。昭和2年刊の『長崎商工名鑑』には日本料理店と書いてあったが、昭和6年には、支那料理「拔天」山口重吉と書いてあった。そして昭和7年の『長崎の史跡と名勝』という本の広告のところには写真入りで次のように書いてあった。

長崎名物 支那料理 しっぽく料理 鋤焼 会席  
由緒深き花月跡 是非御来遊をお待申し上げます  
長崎丸山町(元花月跡)ばってん家 電話1189

当時「ばってん」で支那料理を作っていたのは後の宝来軒の陳さんだったと聞いている。

重吉が亡くなったのは、昭和11年8月21日。そして尾崎ナツ(ツナ)さんは、重吉を看取った人と戸籍に書いてあった。

私の母もこの人が奥さんとはかり思っていたそうで、母は「丸山のばってん」に行くときと食事をよばれ、帰りに大波止の牛乳風呂に入っていくようにとお小遣いを貰ったと話していた。

次男吉松は、明治5年生まれ、東山学院を卒業、英語、ドイツ語、ロシア語、中国語を話し、松が枝町42番地で商社みたいな仕事(石炭、食料品、洗濯物など振り分ける)をしていた。大正時代、吉松は保証倒れで財の大半を無くし、父たち兄弟は大変苦難の道を歩いたようです。吉松は、昭和16年8月3日に亡くなっている。

吉松の五女キクエ(明治39年10月24日生)は、長崎で最初に宝塚に行った人で、大正13年まで在籍していた。キクエさんは長崎公演にも参加して、それを観た父吉松も大変喜んだそうです。(本会協力委員)

その後、明治26年9月30日の買得で角谷弥平外9名となっていた。組合規約も3種あり、明治15年6月13日とあるのが一番古く、営業者人名があるのは明治31年10月1日から大浦東町と書いてあるのは大正2年6月からである。

山口善吉は大浦東町1番から5番地を所有し、5番地に住んでいたが、1番2と4番だけ善吉の名前がなかった。

最近、青田クリーニングが写っているのが明治6年頃と思われる写真が長崎大学図書館にあり、そこには山口の洗濯店も写っていた。

当時は石橋までは居留地で洋館が建ち並んでいた。石橋からすぐカーブになった所に山口クリーニングはあった。そして山口より上のほうは田んぼが広がっていた。

明治時代、大浦川を中心に88軒のクリーニング屋が営業していた。規約書には『各自平等に利益を得て、洗濯物の委託者に対し便宜をはかるを目的とする。』と第1条にあった。役員を決め、係も決めていた。又大浦川を組合総員で毎月3回清掃していた。

山口は、アメリカの御用達で、艦船が入ると急いで仕上げなくてはならないので、徹夜で仕上げ、又、雨の時はストープで乾かし仕上げていた。機械化する前は、大きな洗濯板で洗っていたらしく、父が私に一度見せてくれた事があった。洗濯板を巧みにこなしていたのには驚いた。石鹼は、中国から購入していたので父の兄弟はよく上海に行っていたそうである。炭の入ったアイロンを使用し、洗濯物を干すのには、綱をよつてそれに洗濯物を挟み、道路にも干していた。88軒あった当時から現在残っているのは、青田クリーニングと山口の2軒である。青田さんは、明治6年創業ロシアの御用達だった。

曾祖父善吉は、明治10年頃から大浦諏訪神社を立て直すためか、明治13年京都に行っている。大正3年同社の再建の記念碑があり、そこには、

### 風信

○今年も十二月を迎えました。何か、忙しい、慌しい一年でした。然し、どうにか、本会創立三十年の年の瀬を越す事が出来るようで御座います。本当に有難うございました。

○次に、十一月にはV・ファアレン長崎の方々が発足以来八年の御苦労を経てJリーグ入りをされたとの事、心より御祝辞を御贈りいたします。

○今年の冬至は十二月二十一日(旧十一月九日)であり、この日よりいよいよ大寒に向う日であると言う。長崎の旧商家では冬至の日を「一陽来復の日」と言い床の間に関羽の画像をかけ、供物をささげて商売繁昌を祈り、善哉汁粉をいただくのを例としていた。その故、長崎の旧家には多く関羽像をみかけていたが今は殆どみる事はない。

○その冬至の後十一日にあたる日を「阿蘭陀正月」と言いて、年々出島へあまたの出島役人、通詞入り来る。そして、西洋風の音楽と大宴会が催されている。

○この阿蘭陀正月の行事は大変有名であり其の様子は、文政年間(一八二〇〜)に編集された「長崎名勝図絵」に詳しく記してある。出島の「オランダ正月」は多分出島のオランダ人にとってはクリスマスのお祝を兼ねた祝宴であっただろうと先輩方は私に話して下さった事がある。

○十二月といえば「除夜の鐘」がある。最近では「除夜の鐘」につき、すぐ其の足で長崎三社参りに行かれる人が多い。寺の鐘は梵鐘という、梵とはBrahmanを語源とし、「世界の根源的創造原理」を言うと言っていた(佛語大辞典)

○今月、御寄贈いただいた書籍

第六四回正倉院展開催事務局より『正倉院展図録』。本年の展示品のうち有名なものに螺細細工入り琵琶(聖武天皇所持)、双六盤、瑠璃の盃、銅薫炉、奈良時代の古文書等六十四件の展示品の図録であった。

○平野恵子女史より『新島八重を歩く』来年のNHK大河ドラマ新島八重関係の本で平野女史も本編の中に「八重の兄、山本覚馬と長崎」の事を記しておられる。(潮書房光人社刊・二五〇〇円)

○コスモス短歌会長崎支部久保美洋子女史より『海港No.76』。各氏の短歌と共にコスモス福岡大会記録、エッセー等あり楽しかった。

皆様、どうぞ良き新年を御迎え下さいませ

事務局一同



カット 中村 繁勝 なんばんえびす